

# 令和4年度 第1回飯田市総合教育会議会議録

日 時 令和4年8月5日 午前10時00分開会

場 所 飯田市役所 A301・302号会議室

## 1 開 会

○塚平企画部長

ただいまから令和4年度第1回総合教育会議を開催させていただきます。

冒頭私の方でご説明しますが、この総合教育会議でございますけれど、地方公共団体の長つまり飯田市の場合市長と、教育委員会が教育政策について協議及び調整をする会議でございます。地方教育行政の組織及び運営に関する法律に決められた会議でございます。地方公共団体に設置されるということですので、飯田市においては私ども企画部が事務局をさせていただいているということでございます。私、企画部長の塚平が進行させていただきたいと思っております。

またこの会議は昨年度、今日の資料にもありますが、飯田市教育大綱「結」を成果としてまとめています。これは昨年度完成したものでありまして、2024年までの飯田市教育大綱がこの協議の結果、合意されているものであります。本日は飯田市教育大綱の策定ということではなくて、現下の教育の課題について、二つのテーマでご協議いただくということで開催をさせていただきたいと思っております。

それでは開会の事務説明を以上といたしまして、冒頭市長からご挨拶を頂戴したいと思います。

## 2 あいさつ

○佐藤市長

おはようございます。教育委員の皆様には大変暑い中、またお忙しい中、総合教育会議ということでお集まりをいただきまして、ありがとうございます。また日頃から飯田市の教育行政につきまして、それぞれのお立場から支えていただいております。心から感謝を申し上げたいと思っております。本当にありがとうございます。総合教育会議の趣旨につきましては、先ほど企画部長から話があった通りですが、法律ができた背景を考えますと、市町村長と教育委員会というのは独立した存在として、政治が教育を干渉しない方がいいという考え方で長く運営されてきましたが、それではうまくいかない事案が出てきた。それをすり合わせるという意味で法律が作られました。もとより教育が、政治で左右されてはいけない。そういう大前提の中で調整をしなければいけない。一応予算を通じて調整されることになっているんですけど、総合教育会議において、お互いの考えていることをすり合わせる、認識を共有することだと理解しています。おかげさまでこれまで飯田市の教育行政、あるいは教育というのは、すり合わせの機会をあえて設けなくても大きな意味での方向性というのは、同じ方向を向いて出来たんじゃないかと思っています。総合教育会議が、情報共有して方向性を確認する場であるとすれば、これは大事にしなければいけないと思っておりますし、特に市長部局からすると、大きな方向性をお互い確認するという貴重な場になっています。今日は私の方でも皆さんにお伝えしたいと思いますし、また皆さんがどうお考えなのかということ、あるいは教育委員会がどういう取組をしているかということも確認をさせていただければありがたいと思っています。

それで熊谷教育長さんになってから初めての総合教育会議ということなので、今日は、しっかり熊谷教育長にもお話をいただいて、共有ができればありがたいと思っています。

テーマは今日は「読書の推進と読解力について」と「飯田型キャリア教育」の推進についてです。読書読解力については、私自身も読書とか本を通じて人生が豊か

になっていく、豊かな人生の傍らには本があるんじゃないかと思っています。その中で、子どもたちの本を読む力とか本を読む習慣がもし薄くなっているのだとしたらそれは大きな問題だと思っていますので、今日どんな教育委員会の取組がされているのかということもお伺いしながら、意識の共有ができるとありがたいと思っています。

キャリア教育については、キャリア教育＝職業教育みたいに矮小化されている気がするんですが、子供たちの生きる力をつけるのにいろんな経験を積ませる意味でのキャリアだと私は思うんですが、皆さんと方向性を確認していきたいと思います。

それぞれがしっかりしたテーマなので、もしかするとどちらかが時間が足りなかったりすると思います。今日 1 回で全部完結する必要はないと思いますので、足りなかった分については次回以降に意見交換ができればと思います。

ぜひ皆さんと有意義な時間にしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○塚平企画部長

ありがとうございました。それでは、教育長ご挨拶をお願いいたします。

○熊谷教育長

おはようございます。教育長を拝命いたしましてこれで4か月ちょっと経ちまして、なんとかここまでやってこられたのは教育委員の皆様をはじめ、様々な皆様方に支えていただいてここまで来れたかなあつというふうなことを思っております。本当にありがとうございます。この総合教育会議の中でお互いが共有したり理解することが、とても市民の皆さんや子供たちのためには大事なことになるんじゃないかなと思っております。よろしくお願いいたします。

今日は少し時間をいただいて初めての総合教育会議なので、私の考えた教育観についてお話をということをご依頼いただいたので、ちょっとお話をしたいなというふうに思います。

私自身が教員として38年間、そして公益社団法人の信濃教育会で2年間仕事という場を与えていただいて今日に至っているんですが、今まで与えられた使命はノーと言わずに、できるだけやるということやってまいりましたが、そのことが私自身としては良かったんじゃないかなとも思っています。この場でこういうふうに話をさせていただくこともそうですが、今、少し前にも緑ヶ丘中学校区の小中連携一貫教育の研修会でお話をさせていただいて、私の失敗談もいろいろ話をしたんですけど、いっぱい失敗はしてきているんですが、それでもここまでこれているのは、やはり子供たちあるいは保護者、あるいは周りの先生方や地域の方々に応援していただいているというそのことが何より幸せだったなって思っています。そういう中で自分が大事にしてきたことが、そしてそのことを基にして飯田市の教育行政を預かる教育長の立場として大事にしていきたいことを二つお話できればなと思っています。キーワードはですね、これまでのところでもお答えしていることで、繰り返しになるところもありますが、一つは「心のふるさと」ということと、もう一つは今日も出てきますけれども関係しているかなと思うんですが「言葉」ということとあります。私自身が国語の教員ということもあるんですけども、やはり教育において「言葉」というのはすごく大事じゃないかなって考えているところとあります。いろんな場所を私も勤めさせていただきましたが、常に自分のいる場が一番いい幸せの場でありたいなというふうに思います。それは最近「well-being」なんていう英語を使った言葉もありますけれども、そんな言葉が出てくる前から、自分のいる場所が一番良い場所でありたいなと思っていますし、周りの方がそういう場所であってほしいなとも思っています。実際に学級担任の折には、生徒にとって自分のクラスがあるいは自分の学校が一番ここで学べて良かったなって思える、そういうふうでありたいなと思っています。学級づくりや授業づくりに力を入れてまいりましたが、校長時代には先ほど申したように、こんな学級から学校という意味で、自分が学んだ学級や学校が本当にここで良かった、またぜひ同級会を開きたいと思えるようなですね、そういう学校であってほしいなということで先生方にもお願いをしていたところでありま

す。そうしたことを保護者の皆さんから見れば、自分の子供を通わせたい学校、そういう学級であってほしいということにもなります。そうしたことを私自身の中で「心のふるさと」というふうな言い方をしているわけであり、ただいろんなところへ行っても、もちろんこの地域に残っても、よそへ行ってもですね、あの頃の思いをずっと一生持ち続けていられる、そうした学校が私としては理想であり、地域でもあるかなと思っています。それは中身はですね、もちろんお互いが笑顔で楽しくいられる関係ってというのは、もとより大事ですけども、みんなで助け合って目標達成したり、問題が起これば、みんなで話合って解決をしたり、そうした充実感を得られるような体験ということを大事にしたいなと思っています。つまり、「心のふるさと」にあるもう一つのみそは体験じゃないかなと。飯田市の子供たちにとっては自分の学級とか学校、地域がここでもって、ここの地域で育ってよかったって思えるような教育環境作りをしていきたいなと思っています。抽象的ではありますが、そのためにはまず学校教育の中で学校の授業を大切にさせていただいて、子供たちにとって魅力ある授業をしていただきたいと、魅力ある授業は、子供たちが主体的に学べる、そういう授業でもあるかなと思っています。やはり子供たちが面白がって勉強に進んでいけるためには、先生方がですね、それぞれ個性があると思うんですけども、先生方が皆同じでなくていいと思うんですが、それぞれの先生の個性や良さを発揮して、明るく元気に取り組んでいただくということが一番大事なことだと思います。

二つ目ですけども、「言葉」について申し上げますと、日本の教育者として有名で、もう亡くなっていらっしゃるんですけど、大村はま先生っていう国語の実践者である方がいらっしゃいました。その方がたまたま昭和61年ですかね、下伊那教育会の総会というのがあるんですが、そこでたぶん色紙に残された言葉があって、たまたま私飯田東中学校のときにその色紙を見させていただくことがあって、とても感動して記憶に残っています。その大村はま先生は「ことばを育て、心を育て、人を育てる。教育そのものである。」っていう言葉を残されていました。言葉は時にですね、刃にもなって人の命を奪うような恐ろしいものにもなりうるんですけども、「愛語」という言葉が仏教の言葉でありますように、相手のことを思い、相手の心に届くような、その人の心を温かくするような言葉もあります。愛語での言葉をかけられれば、いじめのようなトラブルも当然起きにくいんじゃないかというふうに思います。そのためにはやはり子供たちが言葉を理解すること、そして言葉で表現することができるようになることがとても大事なかなと思いますし、そのことが学力向上にもつながると思います。コミュニケーションという相互理解もやはり言葉ではないかなとも思っています。やはりそのためには先生方や子供たちが、自分が使う言葉、あるいは人から聞く言葉、読む言葉、そういった言葉に関心を持って、言葉を大切にしたい授業や教育活動をしていくことが、とても大切じゃないかなと思っています。そうしたことを踏まえて、コロナ禍でなかなか思うようにできないことが多いんですけども、教科書を学ぶ授業だけではなくて、目的を持って教科領域を超えた体験的な授業も含めて、地域に出て学ぶような、そんな学習をですね、ぜひ大事にさせていただきたいなと思っています。そしてその体験したことを言葉にして語る、まとめる、振り返る、そうしたことを大事にしていきたいなと思っています。教育理念というほどのものではありませんけれども、まずは「心のふるさと」と「言葉」ということを大事にしながら、皆さんのお力をお借りしながら進めてまいりたいなと思います。それでは様々な教育課題が山積みの状況もありますけれども、一つ一つより良いアイデアを練りながら、精一杯取り組んでまいりたいなと思いますので、どうかよろしく願いいたします。

○塚平企画部長

ありがとうございました。核心に触れるようなお言葉をいただきました。

### 3 意見交換

#### (1) 読書の推進と読解力について～ 新しい時代を生き抜くための読解力とは ～

##### ○塚平企画部長

それではここからは意見交換にさせていただきます。先ほど市長からお話がありました、まずは「読書の推進と読解力について」というテーマにさせていただきます。教育委員会事務局から資料を用意させていただいておりますので、その説明をさせていただいて、進め方とすれば、それを受けて、一旦市長からコメントをいただいて、その後教育委員さんから自由な御意見を頂戴したいと思います。また、市長、教育長につきましては、教育委員さんからの御意見をを受けて、適宜ご発言をいただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

それではまず教育委員会から、ご報告をお願いします。

##### ○松下参与

教育委員会の参与の松下でございますけれども、読書と読解力のところを教育委員会の取組、学校における取組、また図書館を中心とした取組を現在どのように行っているのかを資料に基づいて説明させていただきます。

資料No.1－3に今日のテーマの読書推進ということと、その中に一つの取組として読解力の取組があるわけですが、それについてご説明申し上げます。まずは読書推進、これはやはりその基本は学校教育における授業の中でこの読書の推進ということが読書単元という形で、これは学習指導要領に単元が設定されていて、教科書に基づいて本の読み方等についての授業が行われるというものであります。それ以外に朝読書あるいは全校読書といったような形で、これによって子供たちが読書習慣を身に付けていく。学校図書館においては本の紹介、読みたくなるため活動、図書館環境整備を取り組んでいますけれども、最近の取組とすると、特に学年別図書リストということで、「よむリス」というような名称を使っていますけれども、これを市立図書館とも連携しながらそれぞれの学年に応じてどういう本を推薦ができるかというところの推薦図書を選定しながら、これを普及していくという取組を今しています。

また学校図書館における作り方、見せ方もだいぶ変わってきてまして、これは授業の中でも行われていますけれども、特に本の紹介をポップ等作ってわかりやすく紹介するというのを子供たちも一緒にやるような取り組みは中学校等では図書館の司書教諭と一緒に進んでいるという状況となっております。また、市立図書館の中では、乳幼児から中学生期までを対象にした取組をしていますけれども、昨年度から新たに起こした取組とすると、「はじめまして絵本」に続く「おともだち絵本」ということで、幼稚園の年中にあたる世代に本を全員に配布して読書推進を働きかけるような取組をしています。

また園の方でも家庭への持ち帰りを中央図書館の方からたくさんの本を貸出しをして、それを子供たちが持ち帰るといった取組も進めてきています。小中学生については中央館や地域館、分館それぞれ連携しながら取り組んでいる取組があるということで、そこに記載のような取組を工夫しながら行っているというような状況でございます。

次に読解力の向上というところでありますけれども、これについてはどこまでが読書推進の取組であって、どこからが読書力の向上の取組なのかということと、読解力そのものの定義とその考え方自体がまだ固まりきっていないので、読解力に関連する取組ということで抜き出しをしています。ここでの狙いは、「調べる力」「読み解く力」「活用する力」を身につけていくということを中心としたテーマとしていますけれども、特に授業の中では、だいぶ国語の教科書の改善がされてきてまして、明確に指導要領に基づく単元、狙い、学習目標が設定されて子供たちも読みやすく理解しやすい内容に改善されてきていますが、これを教員が使いながら主体的に考えて深い学びをやっていくということで、これは従来の話すこと、聞くこと、書くこと、読むことをしっかりやっていくということと、特に読解力の向上に関わる場所では説明的文

書による学習ということや、記録文や案内文、報告文等の読み解き方といったことも授業の中で行われるようになってきています。さらに探究学習につながる「課題の見つけ方、調べ方」、これについても授業の中で取り組まれるようになっていきます。また、学校図書館の中では新聞コーナーの設置をしたり、授業にあわせた図書提供をしたり、情報活用能力の育成指導アンケート実施をしたりということで、こんなことも読解力を高めるための一つの取組として進めてきているということで、例えば先行的な学校では、「探究タイム」「一人一探究」っていうような、取組もしながら、読解力から探究につながる学びのサポートをしているということになっていきます。また市立図書館についても、これは地域と連携した様々な社会教育活動の中で、ここでも読解力とそれを活用して探求する力を培うための取組をそこに記載のような取組の中で行っているということでもあります。時間の関係もありますので、全体のあらましについてはこれぐらいにさせていただいて、その後特に学校における読解力を高めるための取組ということで、特に教頭会の中に「読解力向上プロジェクト」を設けて昨年度から取り組んできておりますので、この取組について、担当の方から説明します。

#### ○今井学校教育専門幹

それでは、よろしくお願ひいたします。まず資料No.1-1をご覧ください。教頭会プロジェクト学力向上部会での、昨年度から今年度までの取組の様子をお伝えします。学力向上部会では、昨年度読解力について研究を行いました。そこで取り上げた読解力は、情報システム研究機構国立情報学研究所の新井紀子教授が考案したリーディングスキルテストで測れる読解力、文章を正確に理解し、具体的な場面に適応して判断することができる力について取り上げ検証を行いました。

その方法は、飯田東中学校の2年生、それから遠山中学校の全生徒、鼎小学校5年生、三穂小学校と川路小学校の5、6年生にリーディングスキルテストを実施し、分析しました。リーディングスキルテストとは、国立情報学研究所の新井紀子教授を中心とした研究グループが汎用的読解力を診断するために考案したテストです。検証の結果、リーディングスキルテストで測られた読解力と、各学校が実施しているNRT、NRTとは標準学力検査で、市内の学校が児童生徒の学力を見るために実施している場合が多い学力検査です。そのNRTの結果とに相関関係があることが分かりました。資料No.1-1の下のグラフです。リーディングスキルテストによる読解力が高い方が、NRTの得点が高い傾向になっています。そこで、昨年度の学力向上部会では、リーディングスキルテストで測れる読解力を高めることが、NRTなどの学力検査による学力向上につながるのではないかとというふうに結論づけました。以上の結果を受け、資料No.1-2にあります、今年度の教頭会プロジェクトの学力向上部会ですが、真ん中あたりにあるように、昨年度の学力向上部会で、リーディングスキルテストで測れる読解力を高めることが、NRTなど学力検査向上につながるという結果を受けましたので、今年度はもう少し広い意味というか、様々な読解力というふうに言った方がいいのかもしれませんが、読解力を高めるための取組とその検証方法について、さらに検討を深めていく必要があるということ、それから読解力を高めるために各校で具体的な取組を行っていきましょうということで、目的のある読書指導や読解力向上のための読み取り訓練のようなドリルなどの活動を行う。教頭会プロジェクト自体は年に4回ということで、既に2回終了していますので、今年度と来年度で継続的な取組を行い、その成果を来年度検証していく、読解力が具体的に上がっているのかどうかということを取り組みながら検証していこうと考えております。また、10月の図書館大会には基調講演に参加する予定でございます。以上です。

#### ○塚平企画部長

資料は他にもございますが、ここでの説明は以上とさせていただいて、今の説明を聞いていただいた上での市長のコメントをスタートに意見交換をさせていただきたいと思ひます。

#### ○佐藤市長

読解力って何だろうということになるかもしれませんが、先ほど熊谷教育長のお話

の中で自分が体験したことを言葉にまとめて、自分の中で蓄積するとか振り返るとい  
うような話があったわけですが、言葉の力とはそういうことなんじゃないかなと。自  
分が考えていることを人に伝えたり、あるいは自分が考えていることが何なのかと自  
分で認識するための力が言葉の力ではないかと思うんです。

一方で今、自分も含めて世の中でどうなっているかという、単語だけあるいは見  
出しだけで、こうなんだっていうのを短絡的に捉えてしまったり、自分たちの気持ち  
を、「やばい」という言葉というか単語で言い表してるつもりになっている。でもそ  
れが実際何なのかは自分も含めて分かっていないんだろうというような人が増えてき  
ている。飯田で育った子供たちにはしっかり言葉の力をつけて、世の中に出してあげ  
たいなっていうことを強く思うわけです。その時に、どのような環境を整えたり、ど  
ういう授業をしたり、どういうことができるのかと思います。

今、学力向上プロジェクトの報告をいただきましたが、この学力っていう NRT で示  
されるのは、おそらくそういった言葉の力を考える時の一つの切り口ということであ  
って、少なくとも NRT の点数上げるために読解力を上げようというわけではないとい  
うことだと思いますし、やっている皆さんもそう思ってくださいと信じたい。  
目に見えて、NRT の結果が良くなるっていうことというよりは、もう少し全体の意味  
で言葉の力を子供たちにつけるために、どういうアプローチがあるのかなというの  
を、我々が考えていかなければいけないと思います。新井紀子さんの著書で、AI と人  
間の違いがどこにあるか、あるとすれば、検索エンジンとかそういうのではでき  
ない言葉とか常識とかという力が人間の力であって、それがさっき言った単語でしか  
話ができないっていう単語でしか判断ができなくなってしまうたら、コンピュータの  
方に寄ってしまうと、人間がコンピュータに勝てなくなってしまうという危機感をお  
持ちなので、ちゃんと読める言葉の力をつけさせないといけないというのが、新井さ  
んの思っていることだと思います。そういう意味での読解力、言葉の力を子供たち  
につけてあげたいと思っています。ドリルっていう話も出てきましたけれども、もちろ  
んどリルも使い方があるのかもわかりませんが、例えば、文学作品の作家はおそらく  
助詞の使い方、「は」にするか、「が」にするか、何するか、ここを「、」にするのか  
「。」にするのか、つけないのか、それを考えながら書いている。その意味がどこま  
で読み取れるかっていった時に、さっき言った単語とかキーワードだけで文章ある  
いは中身を捉えてしまうということじゃなくて、文学作品が持つその深さみたいなこ  
とを読み取るためにも言葉の力、読解力が必要だっていうことだと思っている。そう  
いう力をつけるのにドリルも使えるのか、ちょっと分からないですけども、そうい  
う大きなテーマに取り組んでいるのかなっていうことですかね。ちょっと思いが伝わ  
ったのかどうか分かりませんが、これはおそらく表層的な取組ではなく相当深い  
ところまで考えていかなければいけないテーマだと私は思っています。

#### ○塚平企画部長

資料説明と市長コメントを踏まえて、教育委員の皆さん、それぞれご発言をお願い  
したいと思います。

#### ○三浦委員

今市長が言われていたドリルをというところは、私もどうかなっていうふうに関  
心するところが実はあります。

この RST の体験版を自分もちょっとやってみましたけれども、やっぱり自分の中  
にこう定義を具体化するっていうそういう読解力が欠けているなっていうところを自  
分で気づいたといたところもあります。6分野7項目ですか、ということで読解力  
を見るということで、そうすると確かに取扱説明書を読みながらいろいろなものを操  
作するところが確かに弱いかもしれないと、そんなところもそうだなと思ったと  
ころもあるわけです。先ほどの事務局の方から読解力と読書っていう話が出ました。  
先ほどから上がっている新井紀子さんのお話でいうと、読解力と読書というものの相  
関がないというような形でしたけれども、本を読ませていただくと、それっていうの  
は、本を好きかと学力といたところと、もう一つは何の本を読むかといったところ

と読解力といったところに相関関係がないといった、そこに相関関係がないというふうの説明していらっちゃって。読書というものはどうかなと思って、教育学の齋藤孝さんの「読書力」という本を少し見てみますと、本の数的にはというところでは、文庫 100 冊に新書 50 冊なんて数もありましたけれども、それは置いておいて、読んだ本を要約できているかといったところが読書力の一つ。もう一つは、好きな本ではなくて、読み応えのある本を読んでいるかといったところが力ができる。「力」と付くからこれはスポーツとかと一緒に力をつけていく、そうすると好きなものだけに目を向けるのではなくて、苦手な分野であるとか読んだことのない文章を読んで初めてそこに力がついて、力がつくことでそのことを楽しいというふうに思うと。そういうような力なんだというように書いてあって、読書力というそうといった力になってくるのかなというふうに思ったわけです。そうなってくると、新井先生の方の読解力というのを見ていっても、読解力に必要なものという、『AI vs 教科書を読めない子どもたち』の続編の『AI に負けない子どもを育てる』に書かれているのも、これは RST ができるように訓練すればいいというそういうものではなくて、物事をやはり読んで理解して、というところだと板書を写すということのすごい必要性を書いておられるんですね。板書を写すことの必要性は私たちが学校訪問に行っている、とても大事だまってよく委員の皆さんともお話するところなんですけれども、45 分の例えば小学校の授業でも黒板であれば 45 分で完結するように先生方が板書されていらっしゃる先生も結構いらっしゃるのかなと思うんですが、それをどういうふうにノートにとっているかということが大事で、この新井さんが言われているのも、その板書で意味が分からないことを写すという時には、一文字一文字顔を上げながら書いている子、ある程度文章を理解しながら書いている子は頭の上がりが遅い。回数が少ない。そうすると理解ができているかどうかという子供のレベルまで板書を写させることで分かるからという。そんなようなことも書いておられましたので、やはりその何て言うんですか、RST の成績が上がる学力に合致していくのかもしれないですけども、やはりちょっと市長が言われていたように、それを訓練ではなくて、例えば読み応えのある、先ほどの事務局の説明でもよむリスですね。リストはある程度の年代に合わせてこの本を読んでもそれは内発的に好きなものだけに手をつけさせる本ではなくて、もう一步踏み込んで、苦手なもの読まない分野もちょっと読むとか、先ほどいった読書、文をですか、力の方もつけてきて初めてもしかしたら読解力と一緒になるのかなと。そうするとそういった文章を読むことが楽しいと思える子供を飯田市の教育の中から出していけるのかなとそんなように感じます。

○佐藤市長

ドリルのことで言うと、全否定をあえてしなかったのは、短絡的にはちょっとドリルじゃないなと思ったのですが、ドリルの使い方に可能性があるとするれば、似たような文章で違うことが書いてある二つの文とか三つの文を読み分ける力、文章の深みとか言葉の使い方ってこうなんだっていうのを学習できるのであれば、そこには可能性があるかもしれないと思った。単純に今おっしゃったように、この点数を上げるための訓練をするってということだと、なんだか全然違うんじゃないかなと思うんです。なぜ今のが正解でこれが不正解だったのかっていうのをじっくり考えさせると、そういう言葉遣いの違いとか、この助詞一つの違いでこう違うんだっていうのを何回か訓練すると読めるようになるかもしれないと思ったので、全否定はしなかったんですけど、違和感はある。

○三浦委員

そうですね。自分がやってみて本当に短い 3 行の文章をその時間ゆっくりじっくり読んで、何が違ってたの、でまたやり直したんですけど、何が違ってたかと思ってまた読む。何かそういった経験、それ自体は本当にいいかなと思っています。

○北澤教育長職務代理者

私も RST をやってみたのですが、なかなかできない。難しいですよ。自分も国語の教員だったのでですけども、自分はこんな程度の力なのかと思ったりした部分もあります。話を変えて、今、三浦委員、市長が言われたところの話について読解力と読

書というところで今日のテーマに近づけて考えると、読書の質ということがあるのかなと思います。学者の意見をお借りすると、お茶の水女子大学の教授をされていた外山滋比古さんは、一口に言葉と言っても言葉には3タイプあると。市長が冒頭言われていた若者がすぐに「やばい」とかと言ってその一言で済ませてしまうというような、まさに一つ目のタイプ。早い話が日常の最小限のコミュニケーションで使うような、ただ物事を直接指し示すような言葉。人で言うともまだ幼児期のような比較的単語を並べるだけと言ったような言葉。二つ目とすると「お話」。ストーリー。要するに文学作品とか物語とか、フィクション、創作とかいったものになると思うのですが、そこでは、過去や未来を自由に行き来して頭の中に映像を描きながら使っていくような、そういう言葉。それから、もう一つは研究論文とか説明とか事実に基づいて物事を関係付けて示す「論理」。一口に言葉と言っても、三つのタイプがあるのだと。1のことは言わずもがなですが、本当に読解力を培うといった時に、それからまた人間形成の観点からいった時に、結局2と3のタイプ、つまり時間を自由に行き来して自分の中にイメージを作り出せるような、そういう言葉の使い方とか、言葉の理解とか、それから事実に基づいてその結果をきちんと結びつけていくような、論理的な言葉が大切になる。そういう視点で見ると、学校の教科書も非常によくできていて、文学的文章と説明的文章と言われる大きなジャンルがあって、それを別々に扱うのではなくて、一つの作品だけを読んでということももちろんありますけれども、いくつかの作品を読み比べてとか、いくつかをつなげて自分なりの考えを組み立てて表現するといった学習が今はかなり主流になってきているのです。例えばさっき松下参与の方からも話があったのですが、一口に読書と言っても、発達段階に応じて、読書を支援するという一覧表がありました。子供たちの発達段階に応じて、自分の好きな分野だけを読むという読書から、だんだん発達していったらまさに2と3ですよね。さっきの2と3のタイプの両方を読んでいくような支援というのが、うんと必要ではないかと思います。それから今は読むというインプットをする側のこの話をしましたけれど、冒頭で教育長が言っていた、ただインプットするというだけではなくて、自分で調査したり、取材したり、体験したりしたことを発表するとか。それから文学作品を学んだ後、自分も何かしらの創作をして、それを友達同士で共有するとかといったような、表現・発信ということがとても大事になってくるのではないかと思います。いずれにしても、学校の図書館も今だいぶ整えていただいているのですが、改めて資料センターとしての図書館、そういう機能の充実はこれからも欠かせないと思います。そういう観点からいった時に、今、公立図書館と学校図書館の連携がかなり進んで公立図書館の資源を学校図書館の方へ生かしてもらえようという取組がこの資料にもいっぱいありますので、ぜひこれからも進めていって欲しいと思います。

#### ○上河内委員

お話聞きながら自分もそうだなって共感しながらお話を聞いておりました。小さな頃は子供は喜んで本を読みますし、もう何度も何度も読んでほしいということでその時に親が付き合っただけでなく、すごくたくさん本を読んであげたりすることで、本好きになるなというのは自分が親として体験しているところなんですけれども、本好きになったからといって、読解力がすごく優れているかというのは実感のなかでどうもちょっと結びつかないところもあって。結びつかないというのは、北澤教育長職務代理者が言ったように、ストーリーを追ったりするっていうことができて、その先の例えば説明文とか論説文なんかを読んで、例えば高校生ぐらいになってからの話ですけど、論説文を読んだ時に、本当にその要旨をまとめられるかとか、それが何を意味しているかっていうのを、部分部分は読めても全体として何を言っているのかっていうのが理解できるかっていうと、ちょっと壁があるんじゃないのかなというふうに思います。すごい小さな頃は、本当にいろんなお話を読んだり、いろんな体験をして、本に親しむ言葉に親しむっていうことがすごく大事で、それを飯田市では図書館の方から絵本が配られたり、読み聞かせをやったりということで、整えられていると思います。その後、小学校中学校にいくにつれて、どのようにしていったらいいかっていう

のは親の視点から分からないんですが、先生方をお願いしている部分もあるんですけども、言葉は究極的には世の中で使っていく言語なのでみんなで共有することで、とにかく安全でなくてはいけないということで読み違えたら危険なこともいっぱいあるわけですから、みんながきちんと言葉の定義をちゃんと受け取って、共有できるっていうのが最低限の読解力なのかなと思います。さらに進んでその物語を深く読むとか論説文をしっかり理解をしていくっていうのになると、いろいろな先生の力がやっぱり必要なんじゃないかなというふうに思います。

それで今、飯田の西中で始まった新しい取組でこの資料の中にも書かれていたものがあるんですけども、資料No.1-6-1の「8 「読む力（読解力）の育成」、「探究的な学び（情報活用能力育成）」に向けた飯田西中学校の取組」っていうところに書かれていました。ちょうど娘が西中でこれを体験してきた時に、おや、これはなんか違うぞと思ったんですが、こういうことは今まで上のお兄ちゃんお姉ちゃんの時にはなかった取組で、どういうことをしているかっていうと、特に私の目に見えたのは（2）探究的な学び（情報活用能力育成）を目指した「一人一探究」・「探究タイム」っていうような感じで、朝読書の時間などを使って、自分が何かを問いを立てて、その問いを1年をかけて調べたり探究を試みようっていうような取組です。その問いを立てるっていうところもすごく丁寧にやってくださっていて、家に帰ってきて、聞いて何にしたらいいかなというふうに言ってくるわけですね。中学生の頭でって言われると私もちょっと深すぎて答えられない。例えば信頼って何っていうテーマで問いはどうだろうってあって、信頼っていうテーマがあってすごく難しいことになってしまいます。もう少し狭めて信頼をしていると、物事が上手く通りやすいのかとか、なんかテーマを決めるっていうところもすごく考え深めないと問いを立てるということ一つにとってもすごく考える力があるんだなということを見近で見ている感じでした。問いを立てたはいいけれど、次はどうする。やはりネットで検索して出てきたキーワードとかがあるかもしれませんがそれだけ足りなくて、やっぱり図書館に行ってみるとか、そういうことから自分の中で立てた問いがいろんなところにある言葉として散らばっているんだってことを体験しながら、何かまとめていく力って相当すごいなって思っています。でもそれを中学生の時にでもちょっとできるというのはすごく子供にとって幸運なことじゃないかなというふうに感じた次第です。なので読解力っていうことは本当に深いテーマだなと思いつつ、それがこの世の中で、本当に幸せにみんなで生きていくための力となるために見守る必要があるなって思います。

#### ○野澤委員

おはようございます。私もこれテーマを拝見して、自分のことをお話するしかないかなと思って、自分の体験談を。ちょうど4年生の時に、テレビが白黒からカラーにうちはなりました。5年生の時にミュンヘンオリンピックがあって、それを衛星放送で見ることができて、すごい世の中だなんていうのはその時感じたというのを今でも思い出します。でも、大人はテレビを長時間見るもんじゃないと。ということで結構時間を決められて見させられた記憶があって、これって今のスマホと一緒にだよねっていうことを思うと、本を読む習慣を身につけるっていうのはなかなか難しいなというのを実は感じたわけです。他にも例えば、ラジオの深夜放送なんかは、もうしょっちゅう真夜中まで起きて布団かぶって聞いて、翌日こういう話があったねって友達と話をします。こうやって何か昼学校に影響がないわけじゃないのに、でもそうやってそういうものを聞きながら、みんなで話しているのがすごく楽しかった記憶があります。本というものに関して言うと、私横須賀で育っているんですけど、中学校、小学校の周りに古本屋さんが4軒から5軒ぐらいあったんですね。一番最初に見に行くのが少年ジャンプ、少年マガジン。当時30円から50円で古本として買えるんですね。もちろん文庫本などを見て、そうすると、子供の小遣いで身近に買えるんですね、本が、その当時。今古本屋さんほとんど身近にないんですよ。じゃあなんでなくなったかっていうと通信販売に圧されてなくなったと。では、小学校5・6年生が身近にそういう本を簡単に買える環境に今あるかということ、ないんじゃないかなと。身

近になくなってきているんじゃないかっていうのが私の今の感想なんです。子供の頃はそういうふうなことがあった、もっと身近に本があったんじゃないかなっていう気がしますが、なんか今そういうのはなくなっている。結構本好きだったんですけど、何で本を好きになったのかなってずっと考えていたんですけど、何人か本が好きな子が周りにいました友達で。同じ本を読み回したり、そしてあれがどうのこれがどうのという話を学校の授業ではなくて、授業以外のところの時間でそういう話をするのがすごい面白かったですね。当時何でも読んでいたような感じですけど、例えばアガサクリスティとかペリー・ローダンシリーズとか、星新一とかで安部公房とか、ああいうのを読んで、面白がっているんな話をしていたんですけど、先ほど面白いなと思って聞いていたのは、当時ですね、同じ作者の同じ作品、特に外国の方の作品を、違う訳者が書いているじゃないですか。それを読み合っ、比べてこいつのが面白いなあとということを6年生か中学校の頃にそんなことをやっていたんですよね。そういう何か自分がインプットされたものをアウトプットする場があったんで、余計読み漁っていくっていう方向に行ったんだと思うんですけど。それがすごく印象に残った思い出です。今は様々なメディアがあるので、本に興味を持ってもらうこと自体が難しいと思うんです。映像と音声がダイレクトにどんどん入ってくる。これにわざわざ自分が本を開いて読まなきゃならないという、この行為で本を読むって子供たちとしてみると、すごくめんどくさい話で大変なんだろうなとちょっと感じてしまうわけなんですけど、でも、SNSを私全然やらないんですが。言葉ってというのは、映像とかそういうもので表現できない、ものすごく強烈に印象付けて使ってしまう。こういう世界がどんどんエスカレーションすることがすごい危ないなというのを昨日一昨日それを感じたんです。だからもうちょっと活字に慣れていかないといけないってというのは、全体の流れとして思っていることです。前回の委員会でもお話させてもらったんですが、やっぱり読んだものを何かしら要約するなり、絵に表現するなり、アウトプットを出すという場を作ってあげることが非常に大事で、自分は当時付き合っていた彼女と交換日記をやっていて、6年生ぐらいだったと思うんですけど、うちは朝日新聞で彼女の家は毎日新聞で、二人で社説を要約して。でもそれって結構面白いんですよ。そういうことを1年ぐらいやった記憶があって、そのいうのも本好きになったきっかけだと思うんです。そういうことがやれる仲間作りが今できるのかってというのが一番大きな課題のような気がして、多分その環境を提供してあげなきゃいけないというところで、いろんな先ほどの活動が書いてあったところで、結構いいとこいっているんじゃないかなって実は思っているんですけど。そういう部分を理解しながら活動をですね、推進していったらどうか。最後に我々今仕事をやっているとして感じるのは、とにかく今は情報が氾濫する社会なので、それを処理することが仕事になってしまっていて、実際にはその得た情報と、自分が置かれている環境と、あとそれを基にして自分の考えをアウトプットし続けられるかどうか自分がきちんと情報発信し続けられるかかっていうのはこれが一つの社会にとって大きな価値だと思うんですけど。そういうことが身につくのが一番いい方法は、実は本を読むことなんじゃないかなと私は感じています。やっぱり書くことって意外と簡単に書ける。でもこれが一番情報発信としては、一番身近で力強くできる方法だと思うので、こういう世の中ですけど、やっぱり読み込む力ってというのは、やっぱり何か書かせているっていうことは、私は実は大事なんじゃないかなと。そうしないと、読むだけではなかなかその人が理解しているかどうか判別できないので。やっぱりアウトプットをどうやって求めていくかっていうことをうまくこの土壌にのせていくのがいいのかなと感じています。以上です。

○塚平企画部長

ありがとうございました。このテーマにもう少し時間をかけたいと思います。

○北澤教育長職務代理者

最近の国内外の様子を見ていると本当に心が痛いというか、自分の考えが甘いと言われればそうかもしれないのですが、信頼関係をもとに世界のグローバル化が進んで、より良い世界になるということを感じて自分も教員として子供たちに接してき

たし、今現在もそう思っている部分が多いのですが、この近いところに来て、70年75年かけて築き上げてきたものが瞬間に崩れてしまうというようなことを目の当たりにした時、これから生きていく子供たちには今まで以上に「真実を見抜く力」というものをつけてあげることがとても必要だと思います。併せて、学校訪問をさせてもらって教室の様子を見ると、自分が教員をやっていた頃とは格段に違う情報量なのですよ。ICTも入ってきたことによって、瞬間的に膨大な情報がパァッと出てきたりするという状況を見ると、今回は読解力というテーマになっていますけれど、正確に物を把握するとか正しく理解するとかという読解力がとても必要だというふうに思います。その時に、冒頭で市長からもありましたけれど、結局、私達は言葉で考えたり判断したり表現したりしているわけで、その言葉の力がその人そのものになってしまうというふうに自分は思うわけです。子供たちに対しても、いかにその言葉の力をつけてあげるか、その言葉の力と言っている一番スタートのところは何かというと、私が今まで触れてきた、例えば大学の研究者とか、そういう方々のお話を聞いたり読んだりしてくる中で、結局、語彙が一番その根っここのところにあるというふうに思っています。昔だと、たくさん本を読む人は言葉も知識も豊富で、考え方がしっかりしているというのが、ごく一般的な思いでいたのですが、その理由づけはなかなかされてこなかった。ところが、私自身も教わった先生で、日本読書学会の会長でもあり、しばらく前まで筑波大学の教官でもあった塚田泰彦さんという方が、二、三年前に『読む技術』という本を出されて、その本を読ませてもらったらその中にアメリカの読書科学者が研究した研究結果が載っていました。つまり、語彙の獲得ということについてです。とても興味が深かったので忘れられないのですが、特に小学生時代に語彙を獲得させることはとっても大事だと。小学生の語彙の獲得数は普通に生活していると、大体年間3000語だそうです。ところが、1日25分の読書を続けていると、1年間で約2万語、知らない言葉、未知の言葉に必然的に出会うと。そうすると文章の中に意味の分からない言葉、自分の今まで知らなかった言葉があったとしても、6語に1語程度であれば、文脈から読んでいて本人が自分で判断して欲しい意味を正確に掴んでいってしまう。そのようにしていくと、2万語であった言葉のうちの約20分の1、1,000語くらいは自力で語彙として獲得するのだそうです。あまり読書をせずに生活していると、年間3000語しか獲得しないのだけれど、読書を25分続けていくと、1年間で約1000語余分に自力で語彙を獲得する。その累積は非常に大きい。その結果が日本で言っていた、読書をしっかりする、たくさん本を読む人は考え方もしっかりしているということの根拠になるというようなことが書かれていた。読解力と理解力にかかわって、語彙を多く知っているということは、同じ一つのものに出会っても感じ方や見方や表現の仕方がより多様になるわけで、困難に直面した時にも、例えば語彙を多く獲得していると同じ困難に対する挑み方や乗り越え方や、そういうものも違ってくる。そうすると、そういう力はさっき言いましたように真実を見抜く力をよりしっかりと身に付けてあげなければということにも、すごく大きく影響することだと思うのです。さっき野澤委員さんも言われていましたけれど、ただそれを読んで獲得しているだけならまだ理解語彙という段階です。理解語彙を少しでも自分で使える使用語彙に変えていくには、インプットしているだけでなく、たとえ間違っても使って、アウトプットしてみるという、そういう繰り返しを粘り強く続けていくことがすごく大事ではないかと思うのです。こんな話をしてしまうと今日の話合いは何なのだとおっしゃってしまいそうですが、早道はないというか。さっきのドリルの話もありましたけれど、ドリルをちょっと積み重ねたからすごく読解力がついたというような検証は正直言ってやらないよりはいいのかもしれないけれど、ちょっと表面的かなという思いがするのです。言葉というのは、その人そのものの生き方やあり方に関わる根源的なものではないかという思いがします。先ほど、野澤委員さんがテレビが入ってきたころの話をされて、ちょっと余分なことになってしまうのですが、実は昭和33年頃にテレビが入ってきて、漫画が入ってきて、親は高度経済成長期に差し掛かって外に出て稼ぐばかりという時代が日本の復興期です。その時、これではまずいと言って警鐘を鳴らして、「親子20分間読書活動」というのを提唱したのが、喬

木村出身の椋鳩十さんなのです。それは全国で瞬く間に広がった。その親子 20 分間読書活動は、一緒に親と子が同じ本を読むのももちろんいいのですが、教科書以外の本を子供が 20 分くらい読むのを母親が傍らに座って静かに聞く。又は、母親も読んで子供の傍らにいるというのが一番スタートなのです。テレビや漫画漬けになっている、それは豊かさとは言えないと。椋鳩十さんは、読書によって、心、情緒を取り戻したいという思いで、その 20 分間読書活動を提唱して、一時期全国に広がった活動なのです。そんな取り組みもあったということで。ちょっと余分なことを申し上げました。

#### ○三浦委員

今、アウトプットというお話がありました。私も野澤委員さんのお話を聞いていて、ああなるほどと思ったのは、その仲間との時間っていう、アウトプットされた方、みんなで本を読むという雰囲気があるっていうところで、これ大事だなっていうふうになるほどと思ったわけです。思った背景に先ほどお話をさせてもらった齋藤孝さんの『読書力』の中に出てくるのが、中学高校一貫校の生徒に試しに強制的に本を読んでもらうようにしたっていうところが出てきて、1・2・3 学期ある 1 学期に 2 冊ずつ指定された本を読ませるので年間 6 冊ということ指定した本を読んでもらうっていうような形。そうすると 3 年間で 18 冊。中学校の頃がほしい 20 冊ぐらいになるようで、それくらい読ませたと。強制的なことをして悪かったなっていうふうに、ある生徒に問いかけたら、いや、最初は面倒だと思ったけれど、楽しかったよ。あと本棚に本が並んだ時に、友達のような感じがした。まだこれしか友達がいないのかって友達がちょっと少ないなっていう感覚を受けたなんていう感想があったんです。なるほどこんなふうに思うんだなって読んだんですけど、でもそれはクラスってみんなが読むってみんな仲間がやっぱりいたのかなってところをさっきちょっとお話聞いていて思います。強制的に私は読ませる読まされる、でもそこには同じように読んでいる仲間がいれば、多分野澤委員のように同じ本の話をしたでしょうし、もちろん面白かった、読みごたえがあった、俺はこっちが良かった、私はこっちって言う、きっとそんな話も仲間の中でされていたから、楽しい時間がその生徒さんたち過ごせたから、そんな良い感想があったのかなと。そんなこと本のどこにも書いていないですけども、野澤委員の話聞いて思って、そうすれば私たちが例えば子供の教育のために提供しなければいけない教育の環境っていうものが、そういう仲間同士で一つのことに取り組んで、そしてそれもさっき言ったアウトプットもできるような自然で豊かな環境を与えてあげると、強制的にっていうのはあくまでも強制的で言葉がよくないんですけども、そういうことであつたとしても、それが仲間とやっただっていうそういう気持ちになれるような、そんな取組ってのが教育の中で必要なかなと、野澤委員の話聞いていて感じました。

#### ○塚平企画部長

今、お二人が 2 回目のご発言をされましたが、他の委員の皆様よろしいでしょうか。では、教育長お願いいたします。

#### ○熊谷教育長

将棋の藤井聡太さんの言葉が私はいつも引っかかかっていて、すごい言葉を使う人だになって、どういう言語環境の中で育ったんだろうと。「20 連勝した時の気持ちは僥倖です。」とかいうようなことを言って。私も聞いて知ってはいましたけれど、こういう言葉を使えるっていうこと自体がすごいなと思っていて、北澤教育長職務代理者から言われた語彙の豊富さなんじゃないかなと。どういう言語環境の中で育ったりしたのかなとすごく興味深くて、つい先日の三遠南信の中学生の交流会があつたんですけど、飯田市は 2 名ずつですが、浜松市の学校が多いところは 1 名ずつで、私がちょうど副団長の時に阿南少年自然の家で、実際にグループワークをしている時に、ある生徒の使う言葉が他の中学生と全然違うんですよ。語彙がものすごく豊富で論理的な使い方をしているんですね。これまでどういう環境で育ったんだろうなっていうくらいのことを思いました。私はどの学校でもそうでしたけれど、やっぱり読書、図書館で本を借りる人が多い数が毎回 1 学期ごとランキングで出るんですね。一番多く読ん

だ人は百何冊というふうにててくるんですけど、それを見てみると、やはりその学力との相関関係は結構あって、本を読むお子さんたちはある意味テストっていう学力ですけど、そことの関係は非常にあるなあっていうふうにも思いましたが、逆にそうでない子も中に当然いまして、先ほど申したように読書の量＝学力じゃないっていう。でも、この全国学力学習状況調査の結果を前に私も分析した時があったんですけど、でも学力の高い子は総じて読書が多いっていうその相関関係はあるんですよ。ですので、やはり読書っていうことはすごく読解力、学力含めて、とても大事なことだな。逆にたくさん読んでいるけれど、なかなか学力に身に付いていないお子さんを見ると、どんな本を借りているかなっていうと、やっぱり好きな物語の本を読んでいて、多分そのたくさん読むことが喜びっていうふうな読み方をしてるんじゃないかなと感じました。そういうことも含めて考えていくと、どうやって語彙であったりとか、読む経験。読む経験も例えば目的を持って読むとか、楽しんで読む読書も私自身は大いに大事だと思っています。そういう読み方であったり、あるいはこの間も鼎小学校に行ったら、階段にいっぱい英語の言葉が並んでいるんですけど、あれも大事なことで、子供たちの身の回りにどういう言葉が飾られたり、掲示されたりしているかっていうことも、子供たちが言葉に興味を持ったり、言葉を知り獲得するっていう意味でもすごく大事なのかなあっていうふうにも思っています。すごく皆さんのお話をお聞きしていて共感する部分もあって、みんなが藤井聡太さんのようにはなれないんですけども、でも自分のことを伝える、さっきアウトプットという話もありましたけれども、そのためにも、どう理解したり、どう聞いているかっていうことはすごく大事なかなっていうことを感じました。

○塚平企画部長

ありがとうございます。今日は一旦このテーマを市長にまとめていただいて、縮めたいと思います。

○佐藤市長

これは何か結論を出すものではないと思うのですが、確かに藤井聡太さんが「森林限界」とか言っていてびっくりしましたけれども、僕はさっき冒頭言葉の力っていうことで申し上げましたけれど、言葉の力の獲得のルートというか、道筋って多分たくさんあると思うんです。なんとかしてその水脈まで行けばいいのであって、この掘り方しかないっていうことは多分なくて、将棋が好きな子が藤井聡太さんの言葉から、この言葉ってどういうことなんだろうと興味を持っていくのもいいと思います。大体私自身がさだまさしの歌が好きで、さだまさしの歌の言葉が分からなくて、いろいろ調べたりとか、曲の説明や背景を紹介するライナーノーツが各アルバムに入っていて、それがすごく好きで読んでいました。子供には分からないこともたくさん書いてあるので、そこからいろんなことを言葉を知るようになったりとか。いろんな入り口が多分あるので、教育委員会として取り組むとすると、どれか一つのあるいはいくつかの道筋を扱うことにしかならないとは思いますが。言葉を獲得するに至る道筋っていうのは多分いろいろあるので、そういう言葉がとても大事だっていう、その言葉を獲得するための道筋はそれぞれの子供の興味に応じて、みたいなことがどうサポートできるのかなっていうそういう気はとめます。今日ご紹介いただいた、学校図書館とか市立図書館の取組を含めた子供たちが言葉に親しむ環境っていうのはしっかり作ってあげなきゃいけないと思うし。教師とか大人たちっていうのは、子供たちがない言葉を獲得しようという、何か兆しが見えた時に上手くサポートしてあげられるといいなと思うんです。さっきの将棋好きな子に藤井聡太っていうのは一つの例だと思うんですけども、そういうサポートができればいいななんて思いながら聞いていました。

○塚平企画部長

ありがとうございました。このテーマは非常に深いテーマで、各委員の読書観も交えてお話いただきましたけれども、教育委員会の方でも今日の意見を参考に理解を深めていただければと思いますし、このテーマでの懇談はおそらく続くと思いますのでよろしくお願ひしたいと思います。

(2) 「飯田型キャリア教育」の推進について～ 人間力を構築するための「切れ目のない学び」

○塚平企画部長

それでは続きまして次のテーマにいきたいと思います。次のテーマ「飯田型キャリア教育」の推進についてということとして、まずは事務局の方から説明させていただいて、その後市長からコメントをいただければと思います。よろしくお願いします。

○伊藤生涯学習・スポーツ課長

生涯学習・スポーツ課の伊藤です。よろしくお願いいたします。飯田型キャリア教育の推進につきまして、最初に資料No.2-1をご覧くださいと思います。この資料に飯田市のこれまでのキャリア教育の取組を大きく4つの枠で整理をしておりますが、飯田市におきましては、平成18年にキャリアスタートウィークの指定を受けたことを契機に、中学校での職場体験学習に取り組んできております。この取組では、働く人と接することで地域の産業に対する理解を深めたり、働くことの意義や自分の夢を実現するための意欲などを醸成することを目的に実施してきております。平成21年度からは小中一貫したキャリア教育の実践・研究の取組を開始しております。それ以降の研究も踏まえ、平成25年度からはふるさと学習を中核に据えた年間指導計画を作成し、それぞれの中学校区で取組を行ってきております。令和3年度からは、飯田市においても文部科学省が推奨するキャリア・パスポートの活用を位置付けるとともに、幼保から小中、高校さらには高等教育を含めた系統的な取組としていくことや県キャリア教育と連携した伊那谷 de キャリア教育そういった推進にも取り組んできております。それでは続きまして、資料2-2をご覧くださいと思います。飯田型キャリア教育の全体像でございますが、飯田市では教育ビジョンに「地育力による 未来をひらく こころ豊かな人づくり」を掲げており、その実現に向けた中核的な活動としてキャリア教育を位置付けています。上のグレーの色の部分でございますけれども、飯田型キャリア教育におきましては、先行きを見通しにくく、変化が激しいこれからの時代において、地球規模で課題をとらえて物事を考えられるような広い視野と、生まれ育った地域に誇りと愛着を抱く心を併せ持って、子供たちにとっては自分の生き方を主体的に切りひらき、人とつながりあって生きていく力を育む、そういった狙いを持って、右側にあります取組のポイントとしましては、地域の人や資源と関わりながら、実体験をともなう協働的な学びを行える場をつくるということで、行政はそういった活動を人や資源をつなげるそういったコーディネート機能を果たしながら、子供たちの主体性、創造性、社会性、協調性、課題解決力などを育むそういった学習活動を展開していくこととしております。続きまして、下の全体の飯田型キャリア教育の構築のイメージでございます。縦軸に発達段階、横軸を地域や社会との関わりという形で表しております。左下の幼児期から右上の高等教育までの発達段階に合わせて、地域の人や資源と関わる体験的な学びを特徴とします飯田型キャリア教育の視点でそれぞれの活動を体系化して整理をしております。主な活動でございます。左下の幼児期から小学校低学年においては、飯田型自然保育や地域の自然の中での遊びや様々な体験から遊びを学びにしていって基礎作りとなる活動を位置付けております。小学校高学年ではふるさと学習や環境学習などで地域を学び振り返る、書いたり話したり言語化する活動、中学校では職場体験などの地域との繋がりに関わる活動を通じて、それぞれ自分の中で経験を重ね、経験化すること、高校では探究学習で地域の活動に参画して地域に貢献するといった活動を位置付けておまして、それぞれの学びのつながりを意識して取組を進めていくこととしております。今年度は第1回目のキャリア教育推進協議会においても地域や企業、関係する皆さんと飯田型のキャリア教育の方向性を確認いただき、取組をスタートしております。資料No.2-3-1は飯田市の活動を反映したキャリア・パスポートの様式をいれておりますが、小学校、中学校、高校へとつなげていく、そういった活動を設定しております。続きまして資

料No.2-4をお願いいたします。改めて高校への接続ということで、取組を行うわけでございますけれども、今年度、大学誘致連携推進室と一緒に、これからの学習指導要領に探究学習が位置付いておりますので、地域の学びについて先生方と一緒にどの授業に取り入れていくかという観点で、新しい研究会というものを設置をして、今活動をスタートしております。次の資料No.2-5は、市役所庁内のそれぞれの発達段階に合わせていろんな活動をしておりますので、そういったものをみんなで共有しながら、第1回目の会議で意向をまとめたものでございますけれども、**新**については新規の取組でございます。裏面の11番でございますが、若者の創発事業につきましては5月にムトスぷらざが新しくできておりますので、特に主な対象とする高校生のそういった学びの場を作っていくことや、全体としましては、幼保から高校まで連携した取組ということで、初めて進めてまいりますので、中段の推進体制の一番下にありますような、地域人育成（キャリア教育）推進フォーラムというのを年度末開催できればということで今計画をしているところでございます。説明は以上でございます。

○塚平企画部長

ありがとうございました。非常に多くの部署が関わっているということであります。市長お願いいたします。

○佐藤市長

冒頭の挨拶で申し上げましたけれども、飯田型という言葉がついているとはいえ、キャリア教育っていうのと職場体験を中心としたお仕事教育みたいなものに矮小化されてしまって勿体ないなということが、飯田型キャリア教育のこれまでの取組であったと思います。もちろんスタートは先ほど説明があったようにキャリアスタートウィークに指定されて、職場体験っていうところからスタートはしているんでしょうけれども、私自身は資料No.2-2で紹介されているような、こういういろいろな広がりを持った、あるいは深さを持った取組っていうのは、飯田の子供が育つことの豊かさにつながるといいなと思っています。自分自身の体験で大学に進学してから自分は飯田で育ってよかったなってしみじみ思ったというのがあります。大学に入った時点でもう伸びきったゴムのようにになっている人を大勢見てきた。高校卒業までの間に学生が身につけていたい様々な余力などを全部そぎ落として、受験にだけに集中してきたであろう人たちをたくさん見てきた。その反対にあるであろう、飯田に限りませんが、自然の中で育って、どろんこになったり、いろんな遊びをしたり、いろんなおじさんお婆さんと会ったりという、そういったことが子供たちの生きる力をつけていくんだらうなっていうのをしみじみと思います。だから、いわゆる偏差値の高い学校に入れるために、それ以外のことを全部そぎ落としてしまった、そういった学び、勉強ではなくて、どこにどういふふうにつながるかは分からないけれども、いろいろなことを体験したり感じたりしながら、子供時代を過ごすっていうことが将来の生きる力につながるものだと私は信じていますし、それはしっかりサポートしてあげられる環境を作っていければなと思っています。そういう意味ではこの資料No.2-2に表現されているように、小学校に入る前から、高校卒業までという、そういう時間的なアレンジでこういう取組をしていくのは、とても大事なことだと思いますし、これがうまく住民の皆さんにもその良さを分かってもらえることが、ちゃんと整理できて、例えば飯田型キャリア教育っていうのは違う言葉に言い換えることも含めて、住民の皆さんに伝わって、より良い形で進んでいくといいなと。

○塚平企画部長

それでは、ここから委員さんのご発言をお願いしたいと思います。

○野澤委員

大昔ですけど、竹下総理がふるさと創生1億円というのをやりましたよね。多分その頃から地域を活気づけようという政策を国の政策としてやり始めたんじゃないかなと感じているんですけども、なかなか身にならないというのが実感じゃないかと思えます。飯田市は独自に地域人教育というのをかなり前に始めているかと思うんですけど、これ少しずつ身になり始めていた。いたという言い方をしているのかどうか。一昨年ぐらいまで高校卒業生の半分ぐらいの方が地元に戻ってきていた実績が

あったかなと思いますので、良い傾向なんだろうなと思っていたんですけど、これに目をつけた文部科学省が地域活性化の名目で、確か飯田 OIDE 長姫高校に予算を配ってやっていたんですけど、そういうふうになるのはちょっと心配の種だになってというのは思っています、国ではコンパクトシティ構想だとか、スマートシティ構想だとかデジタル田園都市国家構想だとか、似たようなことを言葉を変えて多分いろいろやってきている。なかなかそういう身にならないというのは、やっぱり人が投下されてないっていう部分じゃないかなと私は思っています。なかなか人を定着させるってというのは難しいのかなとは思いますが、一番最初に地域人教育を取り入れていこうと考えた時の初心というか、そういったものをもう一度現状で点検改善するってというのがまずやれるようにするのは私の望みですね。そういうところの原点をちょっと見直さないといけないのかなと。いろいろ広がってしまっている部分があって、ちょっとそこを見直す必要があるのかなと思います。キャリア教育っていう名前が、先ほど市長さんがおっしゃっていましたが、なんとなく目標を決めて、それに突っ走っていくみたいなイメージになりがちなので、なんとなく言葉が。私の印象なんですけれど、そういうふうに感じてしまうので、そういうふうじゃない方がいいかなとは思いますが。これも私の体験なんですけど、私は大阪で生まれて、横須賀で育って、大体夏休みはもう7月20日に1学期が終わるので、21日には小学校5年生くらいからもう1人で大阪の方へ行ってたんです。ばあちゃん子で。そのばあさんの里が和歌山と大阪の堺で泉市の父鬼町という、この辺でいうと多分清内路のようなところなんです。そこでほとんど夏休み過ごしていたので、田舎に生活をおくことがすごい大好きな子供だったんです。でも都会はどうしても自分の人生観と合わないところがあって、そういうのがあって飯田に来たらすごく自分にはフィットしていて、そういう意味ではキャリア教育ってすごい大事だなんて思うんですよ。やっぱりそういう体験がなかったら田舎に行きたいと思わない。それがあってから田舎に行きたいと多分思っていて。当時は川の水をそのまま飲めるようなところだったので、川の水をそのまま飲んで、泳いで、とんぼ採ったり、虫採ったりいっぱいしていました。そうやって跳ね回っていて、いとこ、はとこ、またいとこみたいなと一緒に遊んでいて、私だけ言葉が関東の言葉じゃないですか。そうすると、いじめられるんですよ。言葉が違うって言って。それで一生懸命関西弁を覚えて、何かそういうやりとりとかそういうのがキャリア教育の根っこの部分で面白いなって見て思っているんです、いつも。自分もそうだったなと思ながら。だからそういうものってというのは代えがたいものがあるって、やっぱりそういうものを残していただきたいなと思うんです。そこに大きな予算がなくて、何か変な意図が働かないようにしてもらいたいってというのが一つあるんです。もう一点は、地元に残ってほしいなというのは本当に山々なんですけれど、子供の主体性とか多様性とかっていうのをきちんと担保してあげないといけないというふうに思うので、特に十代の多感な時期なので、いろんなこと、多くの出会い、人との出会いがあるだろうし、きっかけもあるだろうし、それで将来の自分を育てていったり、突然思い立ったり、そんなものだったり、また何か意思で何かのきっかけで将来を描く想像力だったり、人の人生なんていうのは人それぞれいろんなタイミングで訪れるものだと思うので、その中にこういう地元愛っていうのは必ず埋め込んでいってもらいたいんです。けれど、一方では殻を破って成長するきっかけも必要じゃないかなというふうにありますので、キャリアは一つじゃなくて無限に存在するんだと。それをいかに選べる能力を持ってもらいたいなと思います。それで先ほどの資料であったのが、読解力のところであった課題の見つけ方っていう中学生で。これって非常に大事だと思うのが、高校生までの勉強っていうのは、設問があってそれに答えられればいいんです。ですけど、大学卒業するためには自分で課題を見つけてその課題に取り組んで、それについて論文を書かないと卒業できないのが大学だと思うんですけど、その部分っていうのは人生と同じだと思うんですね。自分の生きている中で課題を見つけて、それに対してどう問いかけてどう解決していくか、それに答えはなくて、一番最善の方法で選ぶってというのが、多分自分の一番の幸せな道だと思うんですけどね。それを最善の方法を選ぶために、いろんな経験をしな

いと、いろんな勉強しないといけないんだというのが勉強の本質であるという。そういうところも、キャリア教育で出していくと面白いなというふうに思っています。最後に今の子供たちを支えているご家庭ですね。このご家庭がやっぱり幸せでつづがなく生活をしていないと、なかなか地元回帰は難しい点があるのかなと思います。私達企業はやっぱりそういうところを提供していかなきゃいけないという使命があるかなというふうに思っておりますけれども、今の子供たちがどういうマインドかちょっと分からないんですが、ご両親が苦勞している姿って、何とか楽をさせてあげたいっていうマインドになるのか、それとも、いやもうこういう苦勞はしたくないっていうマインドになるのか。実はうちベトナムの人たちがかなりいるんですけど、彼らは口を揃えて両親をとにかく楽にしてあげたい、だから日本に来て働いている。そのマインドっていいなって思うんですね。それを育むためには、こちらの資料「つながる学校と家庭の学び」で、先ほど読ましてもらったんですけど、これでいくと自分がお手伝いしたことで、お父さんやお母さんに喜んでもらえた。お父さんお母さんのために喜んでもらいたい、そういう気持ちでお手伝いをしている。これってすごく大事だなと思うんですね。やっぱりこういうマインドを作っていくことで、家というか、親というか、そういう家庭を大切に作るマインドの中で、少しずつ先ほど申し上げたような自分頑張って、親をもうちょっと楽にさせてあげたいっていうマインドを持っていけるとしたら、地元回帰っていうのがすごくやりやすくなるというかそういうふうになるかなという気がいたしました。以上です。

#### ○北澤教育長職務代理者

今の野澤委員さんの最後の言葉のところで申し上げると、日本の子供たちもそうだけれど、飯田の子供たちの自己肯定感が今とても低い、それをなんとか改善したいというのも飯田市の学校のテーマというか課題の一つになっている。まさに身近なところから自己肯定感を高める一つが、お手伝いではないか。昔なんか当たり前のことだったのですけれども、今はそれすらない。手伝いする暇があるのなら勉強しろといった話になってしまっている。それは逆に何のために勉強するのかという話だと思のです。お手伝いしたことで、お母さんやお父さんが例えば助かったとか、お仕事から帰った時に既に洗濯物が畳まれているとか、せめてお米が研がれて、あとスイッチを押すだけの状態になっているとか、又は朝起きたら必ず玄関を掃くとかということとはかつて当たり前のことだったと思うのです。それで親が助かる、家族が助かっているという姿を見ながら、自分もこの家族の中の一員なのだという所属感とか、それから自分も役に立っているのだという自己肯定感とか、そういうことにつながっている一番根っこだと思のです。そういう場をほとんど与えないでいながら、自己肯定感が低い、それでうんと子供を褒めましょう、認めましょうというのだけれど、認める材料を作らないで認めましょうと言っても、なかなかそれはつながっていかないと思うのです。余談ですけど、そういうところにもキャリア教育はつながっていくのではないかと。この資料「つながる学校と家庭の学び」の中で何を見てほしかったのかというと、3ページ一番上の部分です。飯田型キャリア教育と言っているのを、先ほど課長の方で説明してくれた資料No.2-2のこの全体像の中で、しかも幼小から高校、大学、専門学校までつながっているこの全体像のものが飯田型という、これも一面ではあるのですけれど、もう一つ飯田型のスタート時点からの特徴は、資料「つながる学校と家庭の学び」の3ページ一番上に書かれている、国が示しているキャリアでつきたい力というのは、「人とつながる力」「最後までやり抜く力」「夢や目標を描く力」「職業・仕事に関心を持つ力」という4分野なのです。そこへ飯田市は「ふるさとを愛する力」を加えようと言って、資料No.2-1の年表のところと言うと、平成22年です。平成21年、22年の頃、偶然私、丸山小で関わらせてもらっていた時に、市教委の担当の方々と何度も相談をして加えたのです。飯田市はその前までも非常に地域と学校との関わりが深く、キャリア教育と言わなくても地域の方が学校に入って、子供たちの農業体験とか、大豆を作るとか、お米を作るとかといった時間に関わってくださっているいろいろ教えてくださっていた。そういうものをつないでいった時に、これからの人づくりの根っこはふるさと愛。それはどうしても欠かせないでしょ

うということもあって、4つ目までの力もちろん大事なのだけれど、そのさらに根っこに座る、心のふるさとを常に子供の時から据えて置きたいという思いで、この5つ目を入れているのです。その5つのつきたい力を土台にして、この資料No.2-2の全体像が出来てきているので、この根底には、いつも地域、ふるさとが直結して流れている。そこまで含めての飯田型なのだということこそ私達は意識しながらこのキャリア教育を進めていきたいと思っています。

#### ○上河内委員

今北澤教育長職務代理者がおっしゃった「ふるさとを愛する力」ということで、いろいろ考えてくださったこのチャレンジウィーク、実は自分のところの息子も、まさにその時に小学生でした。それでやっぱり家に帰ってきてお手伝いをしてくれる習慣というのがあって結構お手伝いもいろいろお風呂洗いとかしてくれました。それはまた学校で報告しながら、お友達と話合うようなこともあったりした中で、本当に家族もありがとうって感じると。役に立ってくれた子供たちと家族の中で自分がいろいろ役に立ってるということが本当にうれしいんだっていうようなことを子供たちがみんな言っていた。自分の長男もそうだったんですね。そういうのは本当にありがたい体験をしたなど、その当時、私も学校によく行ったり来たりしていながら本当に思ったのは、本当にチームのように学校が動いているっていう感覚でした。その温かさっていうので、いろいろ子育てで悩んだときでもすごく力づけられましたし、そういう温かい空気の中で、地域の中で、そして先生に守られてこそ立っていることができたのはすごく感謝しています。今、やはりこの飯田で子育てができたことに感謝しているのは、まさにそういったところでして、それが本当に教育長がおっしゃったように、「心のふるさと」であるということなのかなあとこのように思います。自分自身もやっぱり市長と同じように進学で東京に出て、東京で若干働いた後にこちらに戻ってきたわけですから、やはりその首都圏で暮らすっていうことの大変さっていうのを実感した中で、その時にやっぱり思い浮かんだのは、ふるさとの風景だったり、やっぱりいろんな人たちが近所で声かけてくれた言葉だったり、田んぼや畑を一生懸命やっていたら方たちの姿であったりとか、何かそういったものが目に焼き付いてこの飯田に帰ってきたいっていうふうにやっぱり思ったと思います。なので、この飯田型キャリア教育というのが、そういった精神に基づいて考えられているところはとても感動的だなというふうに思いますし、やっぱり飯田の良さっていうのを、みんなで大事にしながら、そして子供を育てるっていうのがうれしいなというふうに思うわけです。親としても本当にうれしいなと思うわけです。

#### ○三浦委員

北澤教育長職務代理者の方から今お話をいただいて、そうか、飯田型キャリア教育の5つ目のポイントの「ふるさとを愛する力」、教育委員をさせていただいて長く経つんですけども、今更ながら確認をさせていただいて、ああそうだったっていうところをちょっと思いを新たにしました。市長が私の職場、飯田女子短期大学の方に話に来てくださった時に、地域の人が地域に愛着があるところには人が集まってくるっていう話を学生にしてくださって、私もああそうかと思ってお話を聞きました。まさにそう言ったその地域を豊かにしていくっていうところにまずはそこにいる又はそこで育てている子供たちのふるさとを愛する力、こういうものって大きいんだなっていうところ、それは飯田型キャリア教育と言われるものの中にきちんと入っていたっていうところに、ちょっとそうかと思いました。先ほどの飯田型キャリア教育については、市長の方からも飯田市で育ててよかった、自然だとか地域との触れ合いがあったっていうようなお話がありました。その資料No.2-2の表を見させていただくと、本当に自分もこういう中で育ってきたんだなっていうところを思ったりするわけです。地域の中でいろいろなもの、田んぼに入っているそういった写真を見ては、自分も田んぼに入ったとか自分で本当にあの小学校の先生について近所の井水をずっと源流まで上がっていくというようなことをしたかなとか、自分のいろいろなその地域に対する愛着その思いっていうもの、そういった教育を私も受けてきたのかなというふうに、豊かな教育を受けてきたのかなと思うわけです。今この資料No.2-2を目に通し

て、何が豊かですごいのかということ、これがきちんと系統をつけてあって可視化されているという点が、私は一つポイントとして大きいんじゃないかなと、そんなふうに思うんです。本当に私たちは幼稚園小学校中学校高校ときた中で、それぞれに受けてきた教育は先生方の中では概念付けられているのかもしれませんが、どのように育っていったと云ったところは、分からなかったし、明白でなかった。もしかしたら先生方もそうだったのかもしれませんが。でもこうやって飯田市で教育を受ける子供たちのこういったキャリア教育と云ったものは、こんな形に豊かになっていくんだというところが一つあると云ったところ。そして私の時には多分なかったであろう探究活動というものをきちんとこういうふうに位置づけられていて、それをきちんと教育として成り立っている、そういったところが、一つポイントとして大事な点だと思えます。資料No.2-3-1にキャリア・パスポートがあるわけですがけれども、これまさに、ただやりましたという一つ一つが終わりましたという感想にとどまらず、どういうふうに積み重ねていったかということがちゃんと可視化されていると。そういったことで、後からまた振り返れる。もし自分にこういうものがあつたら自分はこうにして、こういった力をつけてきたというところが後からまた振り返ることができて、もしかしたら何か自分の大きな力にもなったのかもしれない。今子供たちは、こういったキャリア教育の可視化できるものが目の前にあって、そういったものを振り返りながら、また先々いってもそれに立ち返りながら、学びを確認できるんだなというところ、こういったところがとても飯田型のキャリア教育として誇れる、評価できる点だと私は思っています。

#### ○北澤教育長職務代理者

今、キャリア・パスポートの話をしていただいたので、手短かに申し上げますけれど、三つあります。その一つは、資料No.2-2が最初は中学校だけだったのです。資料No.2-1の年表のところをいくと、平成21、22年頃までは中学校だけで始まったもの。最初は進路指導と言っていたのですけれど、国がキャリア教育という用語を使い出したのは、平成16年ぐらいのところなのです。21世紀に入る直前、20世紀の終わりのあたり、荒れる中学生とかキレる中学生と言われて、中学生が先生を刺し殺すとか、幼い子供を殺すとか、小学校6年の女の子が同級生の首をカッターナイフで切って殺してしまうと云ったことが続いたのです。それで国もそれまでを振り返って、あまりに知育に偏った学校教育とか、地域や家庭の教育力が低下してしまっているといった反省に立って、体験をうんと大事にしよう、感動体験を子供たちにたくさんさせることを大事にしようという方向へ振り子が触れたというような経過があった。でもそれは中学生だけが対象だったのです。それが平成20年代に入った頃から小学生に広がり、そして飯田市では本来の教育委員会のエリアは義務教育だから、小中学校が主なはずなのですけれど、この資料No.2-2の表のように、高校大学までそして幼稚園まで中に入ってというふうに、一貫して流れてきたという経過があるのです。その学びをつないでいくのはキャリア・パスポート。それによって貫いていくということなのですけれど、三つあると言ったうちの一つは、これが非常に丁寧にできたことはとっても良くて、しかも市内の小中学校では西中、丸山小の9か年を通じたカリキュラムをモデルにして、全部の中学校区に各中学校区の特徴を生かして9か年のキャリア教育のカリキュラムがあるのです。あることとこれができていることはとても素晴らしいことで、いいことだと思うのですけれど、申し上げたいことの一つは、そこに柔軟性と主体性を認めたい。学ぶのは子供たちなので、計画は計画としてあるけれど、該当クラスの子供たちが僕たちはこんなことをやりたい、こんなことを勉強したい、体験したいという意欲を大事にしてほしい。だから、その時には柔軟に計画の差し替えとか、変更をして、やりたいという子供や先生の意欲が認められていく、それが優先するというを確認しておきたいと思っています。計画が先にあることは大事ですが、この学年になったらこの活動をするというふうに、これが形骸化してしまうと、私達が願っていることとはかけ離れてしまうということを思うわけで、基本形はこれだとしても、常に子供たちに君たちは何をやりたいかと問うて、子供たちの発想を大事に位置づけていって欲しいというのが一点目です。それから二点目は今三

浦委員からあった、キャリア・パスポートのところだと思うのですが、これは基本形をやっているのですが、結局このキャリア・パスポートで、その9年間なり、高校までの間だと12年間の自分の学んできた足跡、こしだめしてこしだめしてエキスになるような言葉をこのキャリア・パスポートの中に1年間なり1学期を振り返って残していく。そしてそれを友達同士でも、さっき野澤委員からも出ていましたけれど、同世代というのが子供たちには刺激的というか意欲喚起されるので、同世代の人たちが同じような体験をしたらどんなことを感じたのか、どんなことを思っているのかを、情報交換していくようなことを繰り返しながら、12年間積み重ねていく。そんなキャリア・パスポートになって欲しいと思います。三つ目は、ここで言うことではないかもしれませんが、ちょうど企業の代表の方もいるし、広域連合の連合長さんもいるので、学校を卒業した後、飯田に戻ってくる子供が少ないという話をお聞きしている時に、企業の方が飯田の場合は中学校までで体験学習をうんと充実してやっているから、高校でインターンシップをやるのは必要ないのだというようなことをお話されたのを聞いたのです。それは逆ではないかと思えます。提案したいことは、高校生のインターンシップをもっと具体化する道筋を、ぜひ作るべきだと。さっきの説明で、組織がうんと連携するようになったという図があります。その中で、高校の先生方との懇談会ができるようになったという図が新しく設定されていました。そういうような機会を使いながら、高校生がインターンシップに参加する時間も「総合的な探究の時間」を高校でも今年から実施するようになりました。義務教育では総合的な学習の時間でキャリア教育をどんどん取り上げているわけですから、高校の探究の時間でも、当然インターンシップもその対象になると思うのです。ですから企業と学校と官も入って飯田下伊那地域の高校生のインターンシップを具体的に進める、そういう枠組みがぜひ必要ではないかと思えます。というのは、中学でももちろん職場体験はしますけれど、それはまだまだ浅いもので、さらにもう一步踏み込んで、しばらく先に社会へ出て働くとなったら、どんな会社があるのかというようなことを考える真剣さが違うと思うのです。そうやってインターンシップで地域の企業を知ったり、場合によってはそこであたりをつけておいたりする。こういう資格を上級学校へ行って取ってきて、ぜひ戻ってきてねというような話であれば、かなりつながるものがあると思うのです。義務教育までのところはかなり職場体験も含めてこうやって進んできているのに、最後の出口のところ、まだ飯田下伊那は弱いのではないかという思いがするのです。例えば上伊那なんかの様子を聞くと、かなりインターンシップも進んでいる。その辺のところ、何か工夫ができるのではないかと思えます。以上です。

#### ○塚平企画部長

終了予定時間も過ぎてしまいましたが、今非常に重要なご指摘をいただいたというふうに思います。これから教育長にコメントをいただいた後に、市長からキャリア教育と全体を踏まえて終わりのご挨拶をいただいて終了させていただきたいと思えます。それでは教育長からお願いいたします。

#### ○熊谷教育長

私もキャリア教育という言葉、市町村のところへ行行って説明するという機会が平成22、23、24年頃にあって、まさにさっきの丸山小の頃なんですけれど、そもそもキャリア教育って何よっていうふうにも言われてですね、一生懸命説明するんですけどそれでも分かってもらえなかったという経験があって、市長さんも冒頭でおっしゃったように飯田型のキャリア教育という言葉が、何かもっとう、ぱっと分かるようなですね、そういうフレーズっていうのはとても大事だなと思ってまた宿題としていただかなきゃいけないかなというふうに思います。今お話あったように、キャリア教育の歴史でいくと、本当に飯田も平成18年度からやっているわけですが、このコロナ禍でなかなか思うようにできないということがあって、弱くなってはいないかっていうことを教育委員会でも話題にしていたところです。ですので、ぜひこれは形式化しないように、中身が伴うものを再出発として考えて大事にしていきたいなというふうに思いますし、そのためには、今お話でできたことのキーワードとしてはやっぱり体験っていうどういう体験を子供たちにできるかと、あるいは準備ができ

るか、あるいは主体的に体験に導けるかっていうようなことが、すごく学校教育の中でも大事だし、それは今高校でも大事かなっていうことを思いました。最後の北澤教育長職務代理者の話の中で、この地域の中でもですね、いっぱい素晴らしい企業があるっていうようなことは、確かに私も産業振興部と一緒にやっているカエル事業っていうのがあって、それでなんか YouTube でいろんな企業の社長さんから大学生に向けてお話をしてくださる話を聞くと、本当に素晴らしい企業がいっぱいあるなということに改めて感じているところで、そういった意味でも幼稚園保育園から高校までっていう、このつながりをですね、ぜひしっかりと踏まえていかなきゃいけないなということをお思いました。以上です。

○佐藤市長

今日は今年度第 1 回目の総合教育会議ということで、非常に大きなあるいは深いテーマを二つ入れたものですから、ちょっと時間が足りなかったかなと思いますけれど、本当にそれぞれ委員の皆さんから実体験を踏まえたお話をお伺いして、非常に私にとっては有意義な時間だったなと思っております。本当にありがとうございました。

言葉の力もそうですし、飯田型のキャリア教育、子供たちがいろんな体験をするということもそうなんですけれども、やっぱり長い人生を豊かに力強く生きていくためのベースになるもの、いずれもそうなんだと思っています。それが飯田で育つととてもそういった力がつけられるっていうか、子供たちにそういう力をつけてあげられるっていうそういう環境をぜひ作ってあげればというふうに思っていますので、またいずれのテーマも繰り返し取り上げることになると思いますけれど、ぜひ皆さんと意見を深める中でより子供たちに良い環境を作ってあげればなというふうに思っています。引き続きよろしくお願いたします。ありがとうございました。

○塚平企画部長

昨年度も 7 月末と 2 月の中旬に開催させていただいております。皆様方と事務局で相談させていただきますが、時間を作っていただきまして第 2 回を開催したいと思います。再度よろしくお願いたします。

それでは、以上で第 1 回の総合教育会議を終了いたします。ありがとうございました。

---

閉 会 午後 12 時 10 分